

元海幕長

大賀良平氏対談

1997年6月6日

村田晃嗣0

大賀良平氏（元海幕長） 1997年6月6日

大賀 これはあの、ちょうど防衛白書から、私に関係あると思うものをひろって来たんです。

村田 そうですか。はい。

大賀 先生のご質問のところで、3と4はですねえ、私がちょうど海幕長のときにあるんですけども。これは先に話がありました、統幕が中心にやってるんですね。たぶん常広の後の、左近允さんあたり具体的なことは知ってるんじゃないかと思います。

村田 左近允先生にお話しを伺ったんですが、左近允先生も末期なんですね。

大賀 そうですか。では、よろしゅうございましょうか。

村田 はい、どうぞ、よろしく願いいたします。

大賀 私はこれに従って説明いたしますので、途中でご質問があれば追加して頂いて・・最初の旧大綱に対する政府の反応、というご質問でございますが、一番でございますね。ちょっと流れを言いますとね。まあ兵力整備は一次防から四次防まであるんですが、一次防が骨幹防衛力の整備と、それから二次防以降は通常兵器による局地戦以下の侵略対処、それから骨幹防衛力の充実。ずうっと流れてくるんでありますが、四次防が終わったのが51年でございますね。私が防衛部長で海幕に来ましたのが48年です。このころ久保さんが防衛局長でですね、久保さんは今までの延長上ではもう兵力整備はできないんじゃないかという見解を持っておられたんです。それで我々はよく久保さんのところへ集められましてね、そして久保さんがメモした、タイプしたものを渡して説明されまして。我々は久保学校と称してたんですけどね。それが後から平和時の防衛力とか言う考え方の基本になるわけです。まあそういうことでうまくいけばそれは良しと。ところで、この久保さんって言う人は非常に学者タイプの方でね、私はその当時のメモは持ってないんですけど、久保さんは遺稿集が出てるんですよ。あるいはその中にまとまっているんじゃないかと思うんですが。ようするに、今まで我々が一次防、二次防、三次防、四次防と言って、兵力が足りないんだ足りないんだとやってきたような延長で、もう五次防はできないと。ちょうどデタントの時代で平和時の防衛力というのは、こういうものでいいんじゃないかと。こういうような専門教育をやられたわけですね。（笑）けどやっぱり、四次防までの方式を変えるのにはかなり反発がありましてですねえ。で、そうこうするうちに、坂田さんが防衛庁長官で来られまして、基盤防衛力をまとめられたんですね。防衛力の綱とその考え方の基になる基盤防衛力ができるんですが。まあそれに対してはですねえ、ユニフォームの方では・・・あの従来のやつを脅威対抗の防衛力と言い、基盤防衛力の考え方は、脱

脅威論と言って、さかんに批判したもののなんです。特に陸の批判が強くて、どちらかという
と陸抑制気味の感覚がございましたけどね。

村田 いま鮫島先生とお話を伺っていました。鮫島先生は、あの低脅威ということ、
脱脅威ではなくて低脅威ということ、私ははじめてその言葉を伺ったので・・・

大賀 いや、低脅威というのは正確ですかね・・・特に、OB達は脱脅威論と、久保さんの
理論だと批判するのですがまとまったときは、防衛局長は久保さんから丸山さんになら
わってるんですよ。ここにちょっとご説明しておきますと、各幕の、その、防衛構想という
ものですねえ、ばらばらなんですよ。で陸は、言うなれば国土防衛軍なんですよ。で、
戦場が国土と水際なんです。で、海上自衛隊は対潜軍なんです。もっはらASWばかり
いってる。それで、その周辺海域とシーレーンと、太平洋ばかり見ているんですね。そ
れから、空は防空軍で、要するに、なんて言いますかねえ、戦闘技術集団で、いい戦闘機
を持って、防空一本と、こういうような考え方なんです。で、その三自衛隊の防衛構想に
接点がない。その「接点がない」ということは、後から出てくるんですが、その、穴を埋め
るとするのはアメリカ軍なんです。各自衛隊は単一機能があつて、それを埋めるのはアメ
リカ軍との軍事戦略のからみなんです。けど、アメリカがその頃は何も言わないのです。
それは昭和50年といえど安保条約ができてから二十年以上たっているのにアメリカは日本
の防衛構想についてなにも言わないんです。それは後のガイドラインでつながるんですけ
ど。だからその、自衛隊がアメリカと一緒に日本を防衛するんだと言いながらも、陸海空
の防御的な単一機能の能力だけでは防衛構想に接点ができない。それで、統幕で年度防衛
計画をつくるけれども、アメリカと協力してという文言はあるけれども、そのアメリカの
協力の具体的な中身は何もないんです。

村田 米軍というのは戦後、占領軍からですね、規模は小さくなりますが、そういうのが
残っているわけですね。で、自衛隊に対するですね、ある意味のですね、米軍の過小評
価と言いましょか、自衛隊に一体何ができるのかというのがあるんでしょうか。

大賀 それは当初は過小評価ですよ。だいたい昭和三十年代って言ったら何の努力もない
んですよ。自衛隊も一次防が終わった後に2次防ですよ。それから、もう一つは、ご
承知のように、60年安保の後、アメリカは日本の政局に非常に気をつかうんですよ。それ
から、ユニフォームもまた、シビリアンコントロールということで口封じに会うのです。
昭和四十年代というのは、我々には「物言えは唇寒し」と、という暗黒の時代なんですよ
ね。それは社会党と自民党の・・・変な・・・いわゆる保革対立と言いますが、その55
年体制ですね。社会党は安保・防衛では国会では声高に反対を唱え、自民党は妥協して、

国会答弁から防衛・安保について、いろんなタブーができてきたんですね。非核三原則もそうだし、いろんなことがあって、タブーの時代なんですね。まあその結末が結局、栗栖事件とつながるんでございますけども。今から比べたら、ユニフォームの発言っていうのもほとんどできないぐらいの時代だったわけです。それは「三矢事件」も関係するのですが。

村田 先生、三矢計画はかかわってらっしゃらないんですか。

大賀 ありゃあ統幕でやったことですよ。

村田 ああ・・・そうですか。

大賀 昭和39年のことです。で、あれもですねえ、今から考えればなんということもないんですがね、その当時統幕で、アメリカの日本防衛の考え方が全然解からない。一体戦争になったらどんなことが必要になるのか、ということの図上演習なんですね。

村田 内局は知りませんでしたか？

大賀 それはねえ、内局は、防衛課長は知ってたといわれますね。

村田 ああそうですか。

大賀 ええ、防衛局長の海原さんまで行ってなかったんですね。

村田 ああ、そうなんですか。

大賀 ええ、海原さんは知らなかったんですね。で、それを突然、北海道の代議士さんが振りかざしてやったもんですから、国会で。

村田 岡田春男ですか。

大賀 そうですね。はい。その時にその、内局は皆、奇襲をくらったわけです。でも佐藤総理が国会で「嚴重に処罰する」ということを内容が明らかになる前に言っちゃったんです。

村田 なるほど。

大賀 それでああいうようにもめたんですが。今振り返ればなんということはない。当時それが、シヴィリアン・コントロールを逸脱するものだ、と、言うように叩かれたと。まあ、そういうところでございます。それが後にユニフォームの口封じになるのです。ところで、特に海上自衛隊は、打撃力を全然持たないんですよ、当時。砲では3インチと5インチだけで、あとは対潜装備だけなんですよ。で、基盤防衛力ができたときはですね、私は陸が一番不満じゃなかったのか、と、思うんですね。で、私どものユニフォームから見ればですね。その、私は（笑）「基盤なき基盤防衛力」と。

村田 なるほど。

大賀 考え方は結構なんです。ところが、防衛力拡大のプロセスもなければ、国の戦争能力を、拡大維持する、体制もなわけですね。で、まあ、格好はいいんですけど、中身がないんです。特に国家体制。いざという時に拡大維持するプロセスも何も言ってないし。それから、国家の体制もそういう意味で、何も、できてない。理屈だけあるわけです。で、特に問題が陸の動員力ですよ。私が辞めてから、…1980年の秋でしたか…たまたま、三原さんと金丸さんと、坂田さんと、アメリカで一緒したことがあるんです。そして、大河原さんが大使だったんですかね。で、先生方には車がそれぞれ用意され、私はそのどれかに乗るんです。で、金丸さんも三原さんも車で私と二人だけの時言われたのですが「そうだなあ、もう少し陸を減らして、海空を充実すべきじゃあないか。」というお話しがあるわけです。もう言ってもいいでしょう（笑）。私はね、確かにそうした考えではありますけども。とにかく陸の、その動員力っていうものが全くないんだと。で、今の予備自衛官制度と言うのではだめだ、と。あんなもの動員力に計算されちゃあいけない。先生方がですね、たとえば、十万なら十万と、きちんと動員できるようにですね、戦力となる新しい予備自衛官制度をきちんと改めやっていたら、それで陸上自衛隊の現隊員を減らすと言うなら、それはそれで理屈は通りますけど。今は、さっき言ったように「基盤なき基盤防衛力」で、全然動員力がないのが日本の防衛力の最大の欠陥だと。この状況は今でもあまり変わらないんですがね。それから、その時に言う「限定小規模侵略」に、「独力対処」という文言があります。あそこですね。これは特に陸の主張なんです。ね。……。陸はソ連は北海道に来るという考え方。北海道に四個師団、空挺1ないし2。それに続いて二個師団が海岸に揚陸するというシナリオです。で、海はね、我々はむしろ…海上自衛隊のだいたいのシナリオは中東シナリオなんです。それは、中東の石油地帯にソ連が侵略した場合それがヨーロッパに拡大する。で、ソ連が日本にすぐ来ると言うよりも、むしろ朝鮮半島に、ことが起こる可能性が高いんじゃないか、ソ連が北朝鮮を使ってことを起こすというのが、海のシナリオです。

村田 中東シナリオというのはいつごろから海自のなかでお考えですか。

大賀 ちょうど今、あんまり内局にそういうことを言うとね、遠いところに国の固有名詞がでるシナリオはタブーだったのです。シーレーンの話を含めて。で、私が、その（海幕防衛部長）だった時、オイルショックが起こるんです。昭和49年。それで、演習の実働をやめるわけです。そのかわり図上演習でやろうと。その時は、中東シナリオでした。でも内局にはそっちの方は説明せんで、チャンバラ日本近海の戦争の様相の方だけしか説明しないんですよ。それが49年の、私が防衛庁でやったシナリオです。

村田 あの、ソ連海軍については、どういうふうにお考えでしたでしょうか。つまり、脅威、仮想敵としてはソ連海軍なわけですよ。海上自衛隊としては。その時に、海上自衛隊の戦力は、ご指摘のように対潜ですね、主として。ですからソ連の潜水艦に対しては、やるんですが、ソ連の強襲上陸能力、日本のどこかにやって来る。そういうのについてはかなり大きくお考えでしょうか、それともそういうのはほとんどないものとお考えでしょうか。

大賀 まあ、海の方はあまり大きくは見てませんですね。それは陸とのアメリカの戦力の評価の違いです。ただ、陸自の人は最初は空挺で降りてくる。それから揚陸地域を確保してそんなに大きな揚陸艦ではないんですけど、数隻ありましてね。それで後二個師団ほどが続いて上がってくるんだと。で、それでそれが小規模だって言う考え方です。だから小規模の独立対処というのは陸の主張であって、我々は、アメリカの第7艦隊の攻撃力があるかぎり、ソ連の方もそう簡単に日本侵攻はない。いっぺんそういうふうには日本の方へ手を付けたら、それでもうその戦争は拡大の方向にひろがり小規模ではすまない。まあ、朝鮮の事態であれば、ソ連の代理戦争としてゲリラ的な戦争になる……。私は前の朝鮮戦争にも行ったんですよ。掃海に。

村田 あの掃海に行っちゃるんですか。

大賀 行ったんです。私はその時には、佐世保に居りまして、佐世保から朝鮮戦争を見てきたわけです。その時には、占領下ですからねえ、今はそのときのようなことはほとんどできませんでしょう。特にそのゲリラ対策って言うのは何をやっているかという、港湾は夜封鎖してしまうんです。一切航行禁止で、アメリカが港内のパトロールしています。それで、朝湾口を開いたらすぐ掃海艇がパーっと出て行くんです。で、ゲリラが、機雷を設置していないか、そのチェックをやるんです。そういうふうには非常にゲリラ対策とか、そういう（ことをしていた）。まあ、それにちょっと毛が生えたようなのは小規模になるかも知れんけど。「小規模」とはなんぞや。結局自分でできることが小規模かなってくらいの程度の話なんです。

村田 なるほど。

大賀 「小規模とは何ぞや。」というのは、陸はその、北海道にソ連がくるといった先のシナリオが小規模なんです。ただですねえ、「独力対処」と言うと、国の防衛は国民があたりもの、日本には国民の防衛意識がないからですねえ、そういう意味でこの言葉があっても差しつかえないんじゃないかと。と言う程度で「小規模侵攻の独力対処」を海は了解したと。小規模とは何ぞやというとな誰も解らない。で、陸は「北海道へ行くのが小規模

だ」とこうおっしゃる。今度その文言がなくなったのはですね、ガイドラインができて、アメリカと協力して日本を防衛するという全体の姿が解ってきたわけですね。だからもう、こう言う文言はいらないことになったんです。当時は、アメリカが日本防衛にどうするか解らんし、そのうえ戦争様相の描き方が違うし、その中で陸が一番危機感を抱いた訳ですね。

村田 なるほどね。

大賀 それが、「独力対処」が入ったようなわけです。

村田 今のお話しで、つまりこの限定小規模というもの、私もちょっと引っ掛かっていることがございましてね。つまり、危機のレベルが、こう、縦にありまして、下のここまでは日本がやりましょう、と、限定小規模。それでここから上はアメリカの来援を待つという、そういう役割分担ですよ。これが非常に現実的ではない、と言いますかね、危機の当初から日米共同の部分が当然あって、どんなに上に行っても日米共同がずっとあるはず。アメリカがどれだけもってくれるかの割合は別にしてですね、始めから、当初から分担はあるはずなのに、始めの低い部分は日本が全部やって、そこから上は全部アメリカという非常にきつかいな役割分担だとずっと思っていたんですが、それはようするに日米の話し合いが無いから、アメリカとどこまでやれるか解らないからとりあえずそうしてしておかなければならないということですね。

大賀 しかも、そういうことに、海と陸とが、戦争の様相の考え方が違う。そこで陸の北海道上陸は評判悪かったんです。そんなことはあるかも知れませんが、北海道が戦場になると、一度的を内部に引き込んで反撃するという防衛構想は一般に評判が悪かった。海のシーレーンも評判悪かった。出来ない大風呂敷の構想ということで評判悪かったわけですけどね。そういう意味で、陸はそこに危機感を持っていた。それで、小規模とは、陸はそうおっしゃる。が、まあ我々は自分ができることが独力・・・範囲だと。様相は具体的には解らない、と。ただまあ、独力対処という言葉が国民的にアピールするには、別に害があるわけではないから、という程度だったと思います。で、空はあまりそんな議論には関心がない。空は「我関せず」的なんです。いずれにしろ防空力は必要でとにかく、防空一本ですね。それで今はですね、もう皆防大出ですから、我々に時代は陸軍士官学校と海軍兵学校と、育ちが違うものですから始めっから考え方が非常に違うものですから。今はもう・・・議論はあっても本質的な対立、相互不信はないと思います。

村田 やっぱそれは大きいんでしょうか。

大賀 大きいね。

村田 そうですか。

大賀 今の防大の子はそんなことないと思いますけどね。卒業後陸・海・空に入り、だんだん考え方が変わったにしても、そこに人間同志の不信はありません。我々の時代にははそういうのが無いんですね。「陸と付き合えるか」という海上自衛官がいっぱいいるもんですからね。

村田 ああ、そうですか。

大賀 (笑) そういう人が居るんですよ。「いいや、俺は陸とは絶対やらん」という人も居りますね。

村田 でもガイドラインができたころは、まだまだ、陸士、海兵の方々がトップに居られますよねえ。

大賀 時代はもう少し古い30年~40年代の人ですが。まあ我々のくらいになると戦争中の陸海の対立は実感としてありませんから。あの鮫島さんもそうですが。私もまあ、考え方の違う人と付き合えぬという思想じゃないんですけどね。そういう人も居るんですけどね。もっと古い人にですね。

村田 やっぱり旧軍で、佐官クラスであったとか、そういうご経験をお持ちの方はそうなんですか。

大賀 そうですね、はい。50期台、私は71期ですけどね。

村田 それでは、左近允先生とは同じぐらいの。

大賀 一クラス左近允さんが下です。常広は私と一緒にです。

村田 ああ、そうですか。

大賀 まっ、そんなことで大綱に対する反応というのはですね、一般に陸が厳しかったですね。ただ、理論的に言えば一応はいいんですがね。ただ実態は「基盤なき基盤防衛力」ということが最大の欠陥ですね。一応そういうことにさせていただいて。

村田 はい。有難うございます。

大賀 次にガイドラインの作成についてですが、これは非常に微妙なんですけど。私が防衛部長の昭和50年の3月の参議院予算委員会で、上田哲という人がいて。その人は当時参議院議員ですよ。彼が突然、海上自衛隊と米海軍との間にですね、シーレーンという言葉は使わなかったですけど、「海上防衛に関する密約がある」と、こう言うんですね。で、私は担当部長だったんです。我々としては、「一体何事が起きたのか」解らないんです。「そんなものはないのになあ。何を彼は言いだしているのか」ですね。それでも当時国会でよくある暴露質問ですね。

村田 無いんですか。それは、密約は。

大賀 (笑) ないですよ。それは後で説明します。何がその質問の根拠だったのかですね。それで私は、だいたい日米安保が出来て20年以上たって、具体的な計画が無いほうがおかしいんです。で、韓国はこういうコンテンツシープランがあるんだと、で、NATOはNATOでこういうものはきちんとした計画があるんだと。NATOの場合海上はこういうふうにと区分の海図を示して、日本周辺の場合は韓国との間にはそういう海域のあれは無いけど、NATOはこういうふうに海域の分担をして、そして、全体の作戦はアメリカが支援する、というNATOの海域図みたいなものはありますね。北欧軍、中欧軍、南欧軍そういう図をつけたりして、丸山防衛局長を応援しよったわけですね。それで、丸山さんはそれでえらい熱心でですね。結局どういう政治解決か知らんけど、丸山さんの言い分はですね、それは上田先生の言う通りで、そんな計画が無いのがおかしいんだ、と、是非やらして下さい、というようなことで丸め込んだような感じですね。だいたいあの、共産党の方は、党で、きちんと質問を整理されてですね、それで変な妥協はありません。社会党の先生は個人の情報ルートでこう、やるもんですからね、ガサダネという不確実な情報によるものが多い。これが流行になったもんですからね、三矢事件以来。それで、後で上田さんと私が辞めてから、朝日テレビの一晩中放送する番組で一緒に、そのころシーレーンが話題になっているころでして。あの人は「わしがシーレーン問題は、一番最初だ」とおっしゃったんですけどねえ。で、私が推察するにですねえ、NHKが、その質問の前の年、74年の秋にですねえ、今で言うNHK特集でですね。アメリカの太平洋、アジア戦略をダアーっとシリーズ物でやるわけですよ。私は感心して、「ああ、こんなもんテレビでやるようになったんやなあ」と思ってたんですよ。その時の太平洋軍司令長官がガイラー大将で、太平洋艦隊司令長官がWeisnerなんですよ。で、ウィズナーさんて言う人は第七艦隊司令官もやって、非常に親日家なんです。

村田 ウィズナーが太平洋艦隊司令長官ですか。

大賀 ウィズナーが、太平洋艦隊です。で、ガイラーが太平洋軍です。ええ、太平洋軍の司令長官です。ウィズナーも、ガイラーの後太平洋軍司令長官になるんですけどね。

村田 ガイラーも、もちろん海軍ですね。

大賀 海軍です。ガイラーはですね、VP (哨戒機) のパイロットだったんです。今のP-3Cのような哨戒機の。ウィズナーは戦闘機のパイロットだった人です。ウィズナーは非常に積極的で太平洋を走り回った人でですね。「自分は、パシフィックセイラー」と、いつも言っているようなオヤジさんで、今は退役して、フロリダのペンサコラに居ります

けど。で、恐らくですね、そこの取材の過程においてですねえ、非常に海上自衛隊を、こう、持ち上げたみたいですねえ。ええ、親しくやってんだということを使ったんじゃないですかねえ。それがNHKの取材陣がその辺からそういう印象を持ったんじゃないかと思うのが……。結局、最後に丸山さんと話したときに、彼は何も根拠を示していなかったわけです。で、それがそういうことではないかと思うんです。しかし、丸山さんがですねえ、なんで異常に私どもが、そういうものが必要だと言ったぐらいでそこまで踏み込んだのかは解らないんですよ。ユニフォームの発言に反応して。丸山は海軍の出身で、私の言うことを、よく聞いてはくれましたけどね。

村田 海軍でいらっしゃいますか。

大賀 彼は海軍なんですよ。

村田 短現ですか。

大賀 短現ではなくてですねえ、彼は、兵科予備士官。兵科予備士官の何期でしたかねえ。だいたい最初は陸戦の方に行ったのですが、丸山さんの頃はいろいろの職種に行くようになり、この人は対潜をやってたんですが。はい。私より二クラス上のクラスにあたります。69期ぐらいです。で、久保さんは丸山さんの動きに反対なんです。これをやることにした丸山さんは時間をかけて説得までしてですね。で、坂田さんがOKを出したんですよ、結局ね。

村田 久保さんが反対したのは何故なんでしょうか。大綱をおつくりになった方なのに。つまり、その、限定小規模でやるとなれば、対米協力、日米協力は絶対必要になるわけですよ。

大賀 ううん。やっぱりその、政治的な判断ではないでしょうかねえ。まだ日米安保に深く踏み込むそういう雰囲気がない時ですからねえ。三木内閣でしてね。なんでそういう、アメリカとの安保条約を具体化するのかということでしょう。これは丸山さんに取材されたほうがいいと思いますがね、その辺は。私はちょっと丸山さんの熱意は何が原因かと疑問を持つんですけど。ただ、75年と言うのはベトナムでサイゴンが陥落した年。その二年前にアメリカがベトナムから撤兵しますね。やっぱりアメリカがその頃から、きたるべき新しいアジア、太平洋戦略を模索していたんじゃないかと思います。米政界、世論にアジアから兵を引けとか、まあそんないろんな議論もありましてですね。その時にあの、アブラモウィッツと、74年の11月にですね、丸山さんは山中さんの訪米についていってですね、会ってるんですよ。でその時に色々アブラモウィッツと、意見交換をした。その時の印象もあったんじゃないかと。それから、ウィズナーなど、米太平洋艦隊が、NHKの

そういうシリーズの取材に協力したのも、やっぱりそういう、次の時代に向けてのキャンペーンではなかったかと。今思えばですね。で、恐らく丸山さんの大きく影響を受けたとすればアブラモウィッツとの話ですね、これからは日米協力を具体化して行かないかんのやないかという、印象を持ったのではないかと私は思います。と同時に、アメリカは、今までは日本…なんか、と思ってましたから、ベトナム戦争の敗戦を機に、これからは日本と一緒に、もっと具体化してやっていかなきゃならないんだという、アメリカの国防総省の認識がですね、変わったと思います。さっき言ったようにNHKのシリーズに協力したり。単なる私がですね、そういうことは重要だと、ユニフォームの一人が言ったぐらいですね、丸山さんがそんなにのめり込むとは思わなかったですね。多分その辺が真相ではないかと思えます。

村田 なるほど。

大賀 で、尚且つ久保さんは反対だった訳ですね。これをおやりになるのを。明らかに。丸山さんもそうおっしゃってました。

村田 逆に丸山先生は大綱にはあまり乗り気ではなかったということですが。

大賀 そうですね。ですから、…坂田さんは二年長官をやられた。その前が山中さんですよね。山中さんの時に海幕長が鮫島さんだった。で、オイルショックで、そのDDHの建造をやめろと、鮫島さんに申し渡された。その後、私は鮫島さんにお伴してアメリカへ行ってる時、内閣改造があつて、長官は山中さんか坂田さんと東京から連絡があり、鮫島さんはどちらがよいかと言われるのですね。私には山中さんのどこが良いのか全然解らないんですけどね。しかし鮫島さんがDDHのカットを了承したのに山中さんは鮫島さんに借りができて頭が上がらないといへばオーバーですけど。そんなことがあるんですよ。鮫島さん退官後、山中さんは俺が応援するから、鮫島さんに参議院鹿児島地方区に出ると勧めるのですね。山中さんは非常に傲慢にも見えるけど、やっぱりそういう細かいところもあるでしょう。それだけ坂田さんに較べ山中さんがいいってことは鮫島さん心理的に有利だったのではないかなと思います。坂田長官になって丸山さんはどうして、私どもが言っただけでガイドラインの作成をそこまで踏み込んだのか。やっぱり何かしらアメリカでのアブラモウィッツとの会談でその心証をもっていたのではないかというのが、私の観測ですが。で、坂田さんは三つのことをやられた。一つは、大綱と。これは、…理論的には、私は良いと思うんですが。ユニフォームの評判は良くなかった。低脅威か脱脅威かということで。それから一つは、定期協議はですね、それまでは日本の長官が、向こうに着任のお伺いに行くことはあつたけども、向こうから来ることはあまりなかった訳ですね。

長官になられたら、必ず、中曽根さんも行ったし山中さんも行ったけど、向こうから来ることはなかった。で、定期協議がはじまった。長官だけでなく事務レベル協議も行うことになった。で、その時には、防衛庁の次官が首席で、外務省からは審議官クラスが同行し、統幕からもユニフォームが行く、ということで、日米交互にやっていた。私は、坂田さんのこの三つをやったわけですがね、特にこの定期協議とガイドラインが非常に大きかったと思います。私は、よくね、アメリカとの定期協議で防衛庁が政策官庁になったんだと、それまでは、内局はユニフォームの自衛隊管理庁だったのが、内局が米国防省との交流で一流か二流かは別にして、政策官庁として少なくとも防衛政策に関与するようになった。それまではほとんど内局はそういう米国とのチャンネルを持たなかった。私の政策官庁になったという説は夏目さんあたりも丸山さんも一応賛成しますがね。私は一応そういう見解を取っている。で、それでガイドラインを作ったときの細かいことにはご質問に私十分に答えないのはですね、私は海幕長でですね、あんまり作るときのトラブルとかそういう話はきいてないんです。

村田 先生は、防衛協力小委員会にお出になったことはないんですか。

大賀 ない。ありません。

村田 海幕長は出ないんですか。では室長ですか。

大賀 ええと。いやあの、小委員会には……

村田 事務局長はでるけれども、各幕はでないんですか。

大賀 ええ、統幕が色々取りまとめはしますよ。各幕の意見を。各幕は会議には出ませんよ。

村田 漏れ聞きますのにはね、後に日本有事の研究というものをなさいますよね。それから極東有事の研究というのもございますね。

大賀 はい。

村田 で、日本側は日本有事研究を中心に進めたい、アメリカ側は、日本単独有事は実際のところはあまり考えられませんから、極東有事研究をやりたいというので、日米のあいだで、最初にずいぶんどちらを先にするかというので、……

大賀 それはもう、大いにあったと思います。もともとアメリカは六条事態を重視してましたから。

村田 それはお聞き及びになっているのですか。

大賀 それは辞めてからのことなんです。

村田 辞めてからというのはあれですか、海幕長をお辞めになってからですか。

大賀 はい。ガイドラインができたのは私が居るとき、78年ですが、それによる事態のスタディーは私がやめてからです。

村田 すると、どっちの研究をするかって話は、ガイドラインができてから始まるわけですか。

大賀 そうです。

村田 それからですか。どちらを先にやるかって言うのは。

大賀 ただしね、私が先生のおっしゃることを察するに、ガイドラインで六条問題は非常に軽く書いてあるんです。それはアメリカは不満だったろうと思うんです。あれを作るときにあたってアメリカが、非常に軽く書いてあります。五条は非常に詳しく書いてあるんですが、六条はたった一項目さっと書いてあるだけ。その辺で、アメリカは少し不満を持った可能性はありそうです。

村田 なるほど。

大賀 日本側はまあ、それが精一杯だと、思ったんでしょう。先生のおっしゃるように安保条約ができてから、アメリカはもう六条が問題に緊急性を持っていたのです。始めっから。しかし、日本は全然乗ってこない。私は朝鮮戦争を、佐世保で地方ではありましたけれども、ずっと見てきた。あのときは占領下ですが、新しく朝鮮事態が変わればさてとこれはどうなんだろうなという印象はずっと持っておりましたけれども。それでまあ、五条の日本の防衛をやることはもう、できた以上全然日本に抵抗はないと。そして、シーレーンとか法案の研究とかやるんですよ。しかし、六条は問題が多いので外務省がもう全然乗って行かないんですよ。アメリカは、六条を早くやりたいと言って、五条の研究がすんだら、次は六条だという話を出すのですね。

村田 五条研究が先か六条研究が先かって話でもめるのはガイドラインができてしまった後なんですね。

大賀 後です。日本としては当然五条の研究を先にと考えるわけです。

村田 はあはあ、なるほど。

大賀 それで、ガイドラインができてから後の影響というのはですね、極めておおきいですね。安保条約の軍事面がこれで具体化するわけですよ、様々な。79年の12月にソ連のアフガニスタンへの侵攻があるわけですよ。それから81年の5月にレーガン鈴木共同声明。これでシーレーンのお墨付きになる訳です。これはあの、岡崎参事官が仕組んだんですよ。彼が全部作りあげたようなもんなんですよ。鈴木さんはあの時同盟という言葉が共同声明に入ったのに同盟には軍事は含まないと言ったくらいですから何も解かっていな

い。でもそういう時代の流れですね。それで、日本有事の研究。五条ですね。六条の研究は外務省が逃げてはじまらない、それから、装備の、85年から日米装備技術定期協議で言うのができていく。ガイドラインって言う枠ができて今までの防衛の抑制が外れたから、パアーツと進んでいくわけです。

村田 すみません。もう一度ガイドラインの策定の話なんですけれどもね、76年に日米防衛協力小委員会が発足しますよね、ガイドラインができますのが、78年の11月でございませぬ。ですから、二年以上はかかっているわけですよ。こんなに時間がかかったというべきか、早かったというべきかはわかりませんが、二年間もかかったという理由は何なんでしょう。

大賀 まあ、その役所のことですからね。坂田=シュレジンジャー会談でガイドラインを作ることが決まるわけです。75年の8月。実務的にはだいたい横田の在日司令部と統幕でやるんですけども。ううん、まあ、役所仕事ですからねえ、日本側は初めてのことなどで調整に時間がかかったのでしょう。最終的にできたのは、日本の閣議でできたのは11月ですね。

村田 そうです。11月です。

大賀 だから、案は半年ぐらい前からあったんじゃないかと。もしもめたとすればね、私は知りませんが、アメリカが抵抗したとすれば六条の扱いをもう少し詰めたかたではないかと思うんですね。

村田 なるほど。

大賀 五条の内容はあの時考えたのと、それまで我々が考えたのとあんまり違いはありませんしですね。ですから六条問題極めてあそこに軽くしか取り上げていません。

村田 今鮫島先生にお話しを伺ったときに聞いたことなんですけれどもね、ガイドラインを策定する最初にですね、憲法問題については触れない、予算措置は取らない、それから非核三原則ですか、については、核問題については触れないというような、三つぐらい前提条件が付きますね。あれについてはどういう風に思われました。つまりあの、いま鮫島先生にお話しを聞いたところですね、研究をやるのに前提が付いているのはおかしい、と。ずいぶん反対なされたということをおっしゃってたんですが。

大賀 それはですねえ、そうかもしれません。日本の方は従来の防衛政策を変えずガイドラインを作ることを基準としたので。本来は、先生がおっしゃったように日米共同作戦計画を作るものでなければいけません。日本の法制がきもんと裏付けされて居れば、この研究は両者がサインしていざという時はこれで戦争しますという計画なんです、中身は。

ね。だけど、法制の裏付けは全然日本の政府はやる気はないですから。まあ当時はまだ、社会党との対立などで国内情勢が許さないでいたんでしょう。それで研究作業なのです。だから、今度のガイドラインだって同じような制約は付けてますでしょ。

村田 はい。

大賀 まあ今度は、少しは必要な法制度はやるんだと。有事法制がああ、いわゆる栗栖問題が生じてからもスタディーだけで、もう全然各省が動きませんでしたからね。特に運輸省とか関係各省が動きませんでしたからね。だから、結局はいざとなったらこれに準じて法制を準備してやりますというような研究、研究としか名前が付かなかったんですね。もしそういうことがきちんとしていけば、これは日米共同作戦計画ということになるのです。しかし、ガイドラインができてから初めて陸は米軍との共同訓練を始めた。海上自衛隊は前からやっていたけどもね。陸・空はこのころから初めて共同訓練が始まった。

村田 私最近気付いたんでございますが、閣議了承されますのがね、ガイドラインの78年11月の27日なんですけど、その一日前にですね空が初めて日米共同訓練をやっているんですね。これは何故なんですか。

大賀 (笑) もうやってもいいだろうということになったんでしょうね。

村田 ああ、そうなんですか。まあその原案はもっと前にできていますでしょうからねえ。

大賀 ああ、ええ。

村田 ガイドラインの影響は極めて大きいというお話なんですけど。いま先生がご指摘になったように、海についてはずっと長い経緯がございますよね。

大賀 共同訓練は昭和32、3年頃からです。

村田 ええ。で、ジム・アワーさんなんかにお話しを伺っても、USネイビーとジャパニーズマリータイム・セルフディフェンス・フォースは、双子だから、ガイドラインができたから二つの海軍の共同作業が加速化したとかこうとか、海に関してはそんなにインパクトは直接はないんだというようなことをおっしゃってたんですけど、先生もそういうふうに思われますか。

大賀 そう、比較的訓練はずっとやってましたからね。まあ、リムパックはこの後ですけども。なんて言いますか、共同研究がアメリカとできたということが、やっぱり、陸も安心するわけですね。ああなるこうなると。これまで、陸海がシナリオで対立するのはですね、アメリカはどう関与するかって言うことが全然解らないものですから、陸は陸なりに、海は海なりに、米軍を評価・批判し全体のシナリオが描けないんです。海幕長の時続

幕会議の席で、竹田さんが議長だったんですが、会議後の懇談の時、竹田さんがアメリカは一体、どれくらいで日本の救援に来るか、と聞かれたことがあるんです。さあ、まあどうでしょうね、空母ミッドウェーは日本周辺に居るから良いとして、やっぱりどんなに急いだって、ううん、十日や二十日、アメリカの西岸から来るのは、二週間やいくら掛かるんじゃないでしょうかねえ、といったぐらいの話しかできないのですからね。

村田 ガイドラインができてからですか。

大賀 いや、あの時は、できてたけどまだスタディは全然してませんからね。

村田 はいはい。

大賀 私自身がアメリカ海軍が、来援に来てはくれるでしょうけど、「さあ」なんて言うような時代なんですよ。

村田 ああ、なるほど。それから、共同訓練に関しましては、私今日は数字は持って参りませんでしたけれども、ガイドライン以降一番飛躍的に増えているのは空なんですね。空が急に二桁になるんです。二桁の共同訓練を年間にやるようになりまして、で、海もある程度増えます。で、遅れて陸については1981年ぐらいですかね、初めて共同訓練をやるようになりますが、この三つのサービスに関してかなりの時差といいますか、あるいはそのインパクトがやっぱり違うんでしょうか、陸海空というのは。

大賀 あのですね。空はですね、元々第五空軍が日本に居りますからね、当然やるべきだったんですよ。それから陸の場合はほとんど米実戦部隊が日本にはいませんから、訓練をするには本国から持って来るわけです。北海道とか。日本の演習場を使うのには地元住民の了承も必要で時間がかかる。海空はもう演習場は海の上で、空の上でやりますから。それから、指揮所演習もどんどんやるようになりました。あれなんかも、もう、タブーだったんです。いざという時通信どうするかとか。我々ユニフォーム同志では、密約ではないですが、勉強はしておりましたけどね。三矢研究会では問題がおこるわけですけどもね。いざという時の指揮統合がどうなるのかとか、通信がどうなるのかとかね。まあ今は指揮所演習はどんどんやっていますからね。

{注：指揮所演習 米の指揮所（横田、横須賀など）と日本の防衛庁の指揮所（オペレーションルーム）を通信回線を利用して行う図上演習}

村田 するともう一つこのガイドラインの影響としましてね、あの、先生一番最初におっしゃった様に陸海空の、それぞれの構想というか作戦のすり合わせが日本の中で必ずしもできていなかった。ところが、アメリカ相手に共同作戦をたとえ研究としても話し合うようになりますとね、日本の中で陸海空のすり合わせをしないとイケないというですね、日本国

内での陸海空の統合作用というのがガイドラインで少し働いたのではないかと。

大賀 それは大きかったですよ。

村田 そうですか。

大賀 アメリカが入ってくることに困ってですね、アメリカの役割がはっきりしてきた。陸も「ああそうか」と。それまでは、なんだ海は太平洋の方ばかり向いてって日本海には何も出て来ないじゃないかと。

村田 すると、たとえば陸上の構想ですね、北海道に何師団がやってきて空挺部隊が云々というのを、いままでなら陸上がそうお考えならまあどうぞということ何でしょうけども、統合の話し合いが進むに連れて、海上自衛隊や航空自衛隊が「いやそれはあまり現実性がないのではないか」というようなですね批判をなさったりとかですね、そういうやり取りは起こってくるわけですか。

大賀 私が聞くところによると、アメリカも陸がかなりいままでやってきたのでそのシナリオでスタディーしたらしいですね、五条は。結果はどうなったか知りませんがね。陸は必ずこのシナリオで北海道にソ連軍が来るんだというシナリオを取り上げて、アメリカに見てもらった。

村田 かなり押し切ったという感じですか。

大賀 はい。いうような感じでございます。・・・それまで、海上自衛隊はご覧になると海上の打撃力を全然持たない。で、航空自衛隊は防空一本でしょ。やっと80年代になって、もちろん古いF-86Fという攻撃機は持ってたんですけども、でF-1ができて、今度はF-2という新しい攻撃機ができるわけですね。それまでは防空は最新鋭の強い戦闘機を持ってやるけど海上攻撃は何かあんまりそう関心がない。(テープA面終了)

それまで海は五インチ砲と三インチ砲とかですからね。そんなもんで、海上戦闘が出るはずがない訳です。ただまあ三海峡の封鎖とか何とか言うのは、我々は封鎖というと話が厳しいから管制という、これは機雷や何やでやろうとしてたわけですけどね。

村田 鈴木レーガンの話なんでございますけど、あのときに鈴木さんがシーレーン防衛ということ、一千海里シーレーン防衛のことを、あれは記者クラブですか、でおっしゃいましたね。あれは、訪米前に海上自衛隊としてはかなりブリーフィングをなさったんですか。

大賀 (笑いながら) いやいや。そんなこと全くありません。

村田 していないんですか。

大賀 ここにちょっとメモしてきましたけどね、・・・ここで初めて共同声明に「同盟関

係」という文言が出てきますね。これは岡崎さんが準備するんです。総理大臣は「同盟に軍事は入らない」と日本人記者会見をやるんです。私はね、それがなんでシーレーンの防衛まで踏み込んだか理解できないんです。…ここに役割、こういうことを認めたとあるんです。

村田 「適切な役割の分担が望ましいことを認めた」と。

大賀 そして記者会見での言葉が出る。質問に対して。で、恐らく私はですね、あのとき防衛庁の随員が書いた日本語の答弁はですね、中曽根答弁だと思うんです。中曽根答弁とうのがあるんですよ。中曽根さんが防衛庁長官で国会です、ね、「海上自衛隊どこまでやるんだ」と言ったとき、「日本周辺数百海里」それから「航路帯を設ける場合は約一千海里」こういう答弁をしているんです。国会で。

村田 マラッカ海峡の防衛なんかは問題なところでしょうか。

大賀 ううん、どうかしりませんが、中曽根さんが防衛庁長官やったときの、…で、海上自衛隊が、一千海里という当時の話は、どうせ、護衛はやらないかんだらうと、全部アメリカにやってもらうわけにはいかない。ですから、大阪湾から出ましたらバシー海峡までこれが一千マイルなんです。それから、アメリカ航路は南周りになるだらうと。で、グアム経由になるだらう、と。グアムと日本の中間まではアメリカで北の方は日本でやる。それから、あそこにあれがあるでしょ…沖ノ鳥島ですか。で、二百海里時代なんですね。沖ノ鳥島の二百海里は日本の専管水域になるんです。だいたい北緯二十度、東京湾からそこまでがちょうど一千マイル。そこまでは日本の専管水域だから護衛はやらなきゃいかん。

村田 一千海里の基準は大阪ですか。

大賀 ええと、大阪湾からその、バシー海峡まで、それから、東京湾から北緯二十度。

村田 二点あるんですね。

大賀 そのくらいをやる…構想として、海上自衛隊が主張、正式に認められたわけではないのですが。

村田 沖縄ってのはないんですか。

大賀 バシー海峡から沖縄の周辺をとおり大阪湾までです。それが当時の海上自衛隊が自分で考えて、最小限はやらなきゃならないんじゃないかと内局に説明していたもので、それでも内局からは、「えらそうなことを言う、そんなもんできもせんのに」って、海原さんあたりには悪口を言われてたんですね。それが中曽根答弁ですね、鈴木さんの一千海里の航路帯を英語でどう訳したか。航路帯って言葉がシーレーンって訳すれば、これ

は戦略概念が全然違うんですね。航路帯って言う、そのとき海上自衛隊が言っていた言葉と。

村田 どういう風に違うんでしょうか。

大賀 シーレーンって言う概念は、シーラインズ・オブ・コミュニケーションズで、常に必要な航路を確保して、海上を自由に使えるようにするという概念です。非常に広範な戦略概念です。で、海上自衛隊が航路帯といったのは、なんて言いますかねえ…どどんけ日本の商船隊が増えて、当初船団にスクーリンをつけ直接護衛をやろうとしたんですね。しかしそれでは賄いきれなくなるんですね。それで、海上自衛隊はできもしないことをなんで言うのかと。

村田 つまり、航路帯というのは常に一定の領海を支配するというのではなく、その都度ということですか。

大賀 そうです。

村田 船が行く都度護るという具合に。

大賀 行く都度というか、船にですね、そのときの安全な航路を指示して、それを間接的護衛しようとした。直衛じゃあ、兵力が足りないから。「今度の航路はここを通りなさい」と、ある航路帯を指定して、それを側面から護衛しようとした。

村田 ずっと、こう、ひっついてというのではなくて。

大賀 そうです。

村田 ああ、はあはあ。

大賀 そういう考え方をしたんです。

村田 それが航路帯ですか。

大賀 そのときに航路帯という言葉、海上自衛隊が最初に使うわけですよ。それが、そういう意味で中曽根さんの答弁は、航路帯という言葉、護衛という意味でね、使ったわけです。航路帯を設ける場合は一千マイルと、護衛をする場合はという意味で国会で答弁したわけです。

村田 戦略用語として、シーレーンというのと、SLOCというのは全く同じと考えてよろしいのですか。

大賀 そうです。これは全く同じです。

村田 ああ、そうですか。

大賀 それからその、そこで航路帯が英語としてシーレーンという言葉に非常に近いわけですね。

村田 ああ、なるほど。でも、そうじゃないですか、SLOCという英語でわりと使いますが、シーレーンって使うんですか。

大賀 まあ、略称ですね。

村田 ああ、そうですか。正式にはSLOCが普通の使い方と。

大賀 で、その航路帯とSLOCと…向こうでシーレーンとSLOCは同じような使い方をします。日本の航路帯は、当初はそういう全然違う概念だった。それで、中曽根長官の時はそういう意味で「護衛をする場合は」程度で、航路帯を、中曽根さんはそういう言い方使うの好きですからね。それをシーレーンって訳したからアメリカは（シメた）てなもんですよ。

村田 それでは、リムパックの話は是非。

大賀 リムパックは、昭和46年からアメリカが第三艦隊の企画でやっている演習なんです。でまあ、とにかく太平洋における最大の総合海軍の演習なんです。で、カナダとニュージーランドとオーストラリアが参加している。ただ、ニュージーランドは途中で、核寄港問題で脱落するんですけどね。で、だいたいいつもオーストラリアがメルボルンっていう空母を持ってましてね、あれが米空母の対抗軍になるんです。それから、カナダはですねえ、主力はNATOの方で大西洋の方ですけども、少し駆逐艦とか、フリゲートが数隻西海岸に居りましてそれが数隻参加するぐらいですね、演習に。それから、海上自衛隊は当初からご案内はあって、アメリカは日本を入れることが最大の目標だと。ところがその、共同の訓練は日米はやっても良いんだと、これは安保条約を有効にするために。日米は良いが他の国が関わったものはやってはいけないんだと、言う考え方。ただ、練習艦隊が世界を回り、訪問国の艦隊と儀礼的な程度の訓練はやってもよろしいと。これはいまでもやってること。そういうことなんですね。だからなかなかOKがでないんです。それで私が防衛部長の時に鮫島さんにですね、五回目の頃の時にですね、今度、参加できるように丸山さんに説明しとけて言われるのです。丸山さんに言ったら、丸山さんはそういうものが必要だという理解はされた、まっ考えましようねとおっしゃった。ところがその六回目の時にいよいよ招待したときに、丸山さんは、リムパックのPR映画を見られたんですよ。これはもう、アメリカが同盟を大いに強調してあるんですよ。派手に。で、丸山さんはビビったわけですね。（笑）それで、うんって言わなかったんです。六回目の時。だいたいその、例えば80年に実施する演習だったらですね、80年のその一年前に、79年には計画を立てるんです。だから招待はその前に来るんです。例えば80年ですけど、78年のしかるべきときに来るんですよ。79年の4月にはもう計画に入っていくんですよ。一年前です

から。ところがですね、そこに書いてあります様に、栗栖事件が起こったんですね。ユニフォームと長官との間に何となくギクシャクしたものがあつたわけですよ。それから、新聞記者も二派に分かれるという。金丸派と、ユニフォーム派とかね。で、そういうときに、佐々さんが、佐々淳行さんが……

村田 教育全担当の。

大賀 そう。それから、さっき言った岡崎さんが、

村田 国際担当参事官ですね。

大賀 それだからもう、内局の雰囲気が変わるわけだ。この二人、積極派ですから。

村田 はい。

大賀 おかしいんじゃないの、防衛庁の考えはつて言う位の雰囲気になるんですね。で、丸山さんは、内々はOKを出していくつて考えましようや、と言われたんですよ。で、栗栖事件が起きて、金丸さんは「訓練は大いにやれ」と言うわけですよ。それで、私がリムパック参加を直訴したわけですよ。長官に「やるべきですよ」と。そういうものは参加すべきだ、という。ないないに。丸山さん、いや内局に入るわけですよ。それで、私は栗栖事件の影響だと思ひますが、長官はリムパックがどんなものかも良く知らずに「いや、訓練なんか大いにやるべきだ」と言うわけですよ。で、佐々さんはもう、そういうのが好きだから、大いにやれやれ！とこう。それで、それじゃ次はもうやるかと。で、山下長官、山下さんに代わられてから、山下さんは「そうですね、参加ましようね」と、こういう話になるわけですよ。

村田 つまり、いまの話で言うつと金丸さんは栗栖事件があるから、制服に対してある種の心理的負目というか、があるということですね。

大賀 私はそういうふうに見たわけですよ。

村田 なるほど。

大賀 私が言ったように「大いに訓練なんかはやるべきだ」と、こうなつたから。

村田 はい。

大賀 しめたと思つて。ですからこう、事務的に上げていつたわけではないんですよ。ただ、海上自衛隊としての一応の理屈は必要ですね、三つほど挙げておきました。それはこれにもご覧になれば、国会答弁で塩田さんがやつておられますけどもね。まず、海上自衛隊はASW軍団だということ。ASW一本でやつていつたのに、だから、総合の海軍による作戦つていつたものはどういつたものか知らないわけですよ。リムパックに参加するだけで、その大きい作戦の概要を知ることが出来るわけですよ。マルチプルな、海軍作戦つていつたもの

は、海軍指揮官の常識として、ここでしか学べないんだと。日本近海では、いろんなASWの訓練に限ってやるわけです。だから総合的な海軍の様相を知らない。いざっていうときは、そういうことを知らない共同作戦はできないよ、という意識はあるんです。けど、当時はそこまで踏み込まず、ネイビー・オフィサーの教養としてどうしても必要だと。政治的に問題の起きそうな表現は避けてました。共同作戦という言い方はまだ当時は危険でした。まだ日本有事のケーススタディーも入っていませんから。それと、二番目には、我々はASWとしてこれまで努力してきたわけです。それが、世界的水準でどういう風な評価を受けるのか。われわれ、原子力潜水艦をもちませんからね、ときどき米原潜ターゲットサービスはしてくれる、日本近海で。ただ、総合的な演習のなかで、我々が原子力潜水艦に対してどのような評価を受けるか。この評価を知りたい。これは筋が通る話です。それから三番目には、あそこにはミサイルレンジがあるんです。ハワイのオアフ島のちょっと北の方に。そこでミサイル発射もできるんです。実射ができるんです。いま日本では、海上でドローンを飛ばしてやっていますけど。それから、海底にマイクロフォンをいっぱい置いているんですよ。実際の潜水艦に対して魚雷が射てるんですよ、訓練用の魚雷が。それは日本じゃできないんですね。魚雷の評価は、そこへ持って行って、いまでもやっているんですよ。その三つを挙げたわけです。

村田 あ、原潜相手の訓練って言いますかねえ、原潜がどの様な風に評価してくれるかって言う話は、日米バイではだめなわけですか、マルチでやらなければだめなんですか。

大賀 いやいや、それはね、アメリカがずっとね日本の近海で専属で潜水艦を出してくれば、日本で色々勉強できるんですよ。ただ、向こうも日本近海で暇があった時、ターゲットサービスだけやるわけで、本格的な原子力潜水艦を中心の訓練はできなかった。最近アメリカも少しのってきてやってくれているようですが。私が海幕長だった時に、7艦隊司令官はフォーレー中将でしたが、で、彼に「ターゲットサービス専用に原潜一隻日本に使わしてくれ。オペレーションコストは日本が払うから、一隻日本に訓練用に貸さないか」と言ったことがあるんです。当時、向こうもまだロサンゼルス級ができる**始め**で、「いやあ、うちも潜水艦足りないんだ」と言われた時代なんです。だから非常に、原子力潜水艦に対してどうやるかというのは非常に訓練不足だったわけです。当時はですね。まだP-3も入る前ですからね。で、まあそういうことで、実際の訓練の場で海上自衛隊のASWなどのものを評価したい。これはもうきちんと筋の通った話です。それと、実際に魚雷やミサイルを射つ。武器体系の評価をしたい。この三つを要求したわけです。まあ筋が

通る範囲、それじゃ、やりましょうということで長官がG0を出したんですね、山下先生。ところがその、ハワイの第三艦隊には日本の艦船が、しょっちゅう入港するものですから、連絡官としてスタッフが行ってたんです。三艦隊幕僚に、それで、G0でたからその翌年79年の4月から、訓練のオペ・オーダーの作成体勢に入ったわけです。だから、同じスタッフがいるオーストラリアあたりから「おっ今度は日本が来るんだ」と、はやばやと外電でまわってきたわけですよ。シドニー電で、日本がどうも参加するらしい、と。で、それをもみ消して、（笑）参加するって発表したのは秋ですからね。十月頃の記者会見で発表したわけですから。もみ消すのは…。しかし、国会の答弁やなんやで、そのときの在日米海軍司令官ゼックス少将と言うんですが、その人と防衛部長吉田君で、非常にもう国会答弁の想定問答も二人で作るし、それにマンسفールド大使ですよ、駐日大使は、大使までいろいろと支援されたんです。ですからまあ、最終的には、日本をいかにこの演習に誘いこむかということが、最大の米国の目標で、太平洋で日本なくしてこの演習に意味はない、という程のものなんです、本来は。だけど日本がそういった、いわゆる外国との訓練は日米に限るという考え方で、当時のことなんですけどもね。で、当時ですね、韓国がもしこれに参加していれば、日本の参加はだめだったんです。

村田 韓国は後に参加していますよね。

大賀 はい、そのときはすでに日本は二回も参加していましたからね。当時はそう言われたんですよ。韓国が参加するなら、これは難しいなあ、と内局が言ったわけですよ。でも、しかし後からですからね、その話は全然出なかったようです。

村田 なるほど。

大賀 それで、私は辞めてからですからね、船が日本を出港したのは。私は80年の2月に辞めたんです。

村田 ああ、そうなんですか。2月に退官。

大賀 それで、私が79年の秋、記者会見で参加を発表したら、読売の西島っていう記者が来まして、「招待してくれ」と、「リムパックに」防衛庁記者団を。それで、私が「わかった、米海軍に申し入れておく」と言って。米側は「なんでそんな沢山来るんだ」と言ったけど「これ大事なことから是非やってくれ」と申し入れたら快く引き受けて…50人ぐらい行ったんじゃないかな。私辞めてからですが、日経の日野君とかリムパックに行く連中が「どこ見てきたらいいんですか」と言って私の家に来たぐらいなんです。で、それを（招待を）やったんです、まあ、色々書きましたよ。新聞にね。朝日の田岡君などあれこれ。書きましたけど、それですべて一巻の終わり。二回目以降はもう、なんに

もない。それは非常によかったですね。それで、NHKの五十嵐君など、たまたまそのとき、「あまつかぜ」が発射したミサイルが標的のドローンに命中して落すんですよ。NHKのテレビではもう、感激しちゃって（笑）。それからもう、二回目以降はね、何もありません。初参加は色々書きましたけどね。で、やっぱり最大の狙いは、日本が参加したという政治的な意義、が、最終的なアメリカの狙いでもあったし…。でも我々はそういうことは参加の理由には言えませんから。まあ、日頃から日米共同作戦とか、こういうことを勉強しておかないとできないという部分は言っていないですから。我々の教養として、実際に基本的教養として私はこれが必要なんだと言った。で、ASWの評価、それと実際のウエポンシステム。ということで、御了解を頂いて。それから佐々さんもこういうこと好きですから、GO、GO、GOですよ。岡崎さんとお二人が来られてから、本当に防衛庁の会議の雰囲気が変わったんですね。防衛庁っていままで、どっちかって言えば非常に抑制的だったのに、「そんなんのおかしいんじゃないの」っていうお二方の意見が出ましてですね。まあ結局、80年のリムパックへの参加は、山下先生が最終的にはGOを出したわけですけども、金丸先生がね、訓練は大いにやれと言ったときに、私が一つ原因を作った様な恰好になった。その背景には、栗栖事件の影響だと私は思う。他の方はどう見てるか知りませんがね。

村田 あ、もうお時間があれでございますから、最期に一つだけ…。漠然とした質問でございますけどもね。栗栖事件もございましたが、自衛官として海幕長までずっとお勤めになりました、どうでしょうか、内局と制服との関係というのが、あるときからよくなったとお感じになった時期はございますか。それとも、わりと御在官の間はぎくしゃくした感じが続いたと、お感じですか。

大賀 私は、防衛部長と防衛局長、次官と海幕長で、丸山さんとは、非常に、もう、良かった。ざっくばらんにもいろんなことも言われてましてね。しかし、一般にはどうでしょう。…丸山さんは海軍に対して理解もありましたからね。だけど一般には、昭和40年代というのは、ユニフォームはとにかくもの言えない時代。

村田 昭和40年代ですね。

大賀 そうそう。私が防衛部長の時にですね、共産党からですね、「海上自衛隊は反共産党の教育をしている」と言ってますね。それは、陸上自衛隊の共産主義の解説の本を使ってたんですけどね。けっして反日本共産党の教育をしているわけではないんです。共産主義に対する、まあ、海上自衛隊に限らずどこの自衛隊でも批判的な教育をするのは当然だと思うんですけどもね。だけど彼、松本善明氏、あれは75期なんですけどもね。

村田 ええ。あつ、そうなんですか。

大賀 ええ、75期なんです。それから東中氏、あれは73期なんです。

村田 海兵出てるんですか。彼は同志社なんですよ。

大賀 ああ、そうなんですか。(笑)

村田 田畑忍さんのお弟子さんでね。上井たか子さんと同門ですね。

大賀 ああ、そうなんですか。それで、松本先生が直接私の部屋に来ましてね、内局は全然それはバッファになりきれないんです。大西っていう教育参事官でしたが。それでその、焚書の刑ですよ。全部集めて焼けて言うわけです。

村田 ほう。

大賀 我々は共産主義に対する教育はしているけれども、日本共産党を誹謗するような教育はしていないと言うけど、聞かないんですよ。私の部屋まで乗り込んできて。

村田 先生は防衛部長ですよ。

大賀 防衛部長です。そういう時代なんです。それが昭和50年・・・49年でした。そんな話もございました、焚書の刑でね。だから内局もねえ、まあ全くもって無能ですよ、バッファにも良くなり切れていない。そういう点ではもう、佐々さんあたりからちょっと変わって来るんですよ。まあ、ですから、御承知のように、海原さんは、「アンチ・ネイビー」で有名ですよ。

村田 ああ、そうなんですか。

大賀 御自身で、そうおっしゃるんですよ。

村田 何故ですか、それは。

大賀 海原治というお名前ですが御自身で「海原治まらず、陸原治む」と言うぐらいですからね。まあ、本格的にアンチ・ネイビーっていうわけじゃないけども、まずシーレーンが気に食わないわけです。「海上自衛隊は、できもしないことを大風呂敷を広げる」。旧軍もね、文書だけで命令が出て、実態が伴っていない、と言うのが、あの人の持論なんです。あの人は陸軍経理士官ですからね。

村田 でも、海原さんがおやりになっていたころの、海原さんの影響力って言うのは絶大だったんでしょう。

大賀 絶大です。

村田 彼は結局次官やらないわけでしょう。

大賀 やらないんです。石田さん(海幕長)は、アメリカで一緒だったんです。で、鯨島さんもアメリカで。

村田 御一緒ですね。

大賀 ええ、ですから、個人的には良く知ってるんです。ですから、個人的には良いんですけどもね。彼の「シーレーンなんてものは、大風呂敷を広げてできもしないことを言う」と言う海原さんの。私も事実ね、30年代はね、原子力潜水艦がね、あのノーチラスが動いたのは1957年ですか。それから、ジョージ・ワシントンが最初にパトロールに入るのが1960年頃ですかね。で、その原子力潜水艦にたいして、海上自衛隊の装備じゃあね、当時の装備じゃあできないことは事実なんです。でも、海上自衛隊はそれしかやることがないわけです。ASWぐらいしか。それはまあ、海上保安庁ぐらいのことで良いじゃないか、というのが海原さんの思想で、何も一千海里とかそういう大風呂敷を広げる必要はないと。ところが、海上自衛隊はそこへ行かないとブルクオーターネービーにはならない。だから、ASW、護衛は下せない。それが気に食わないんです。

村田 なるほど、と言うことはあれでしょうか、内局一制服のことを言いますと、少し強引かも知れませんが、ガイドライン以降、結局非常に実務的な作戦の内容に立ちいった話で日米協力が進んでいくようになると、どうしても制服の経験とか知恵とかいうものが意味が出てきて、すると制服の発言を無闇やたらと押さえ付けるわけにはいかないと、そういうこともやはり関係しているのでしょうか。

大賀 はい。だいたいはその、海原さんもそれから後藤田さんも、内務省。自衛隊ができたときあの人達は、旧軍のようにユニフォームを暴走させないために来るんですよね。当時の。だから、防衛庁内局は、自衛隊管理庁と言うんですよ。だから常に内局とユニフォームは、いわゆるシビリアンコントロールということで緊張関係にあった。ただし、50年頃から変わってきています。坂田-シュレジンジャー会談や、このガイドラインを作ろうという雰囲気から、がらっと変わってきました。いわゆる内局が、政策官庁としてユニフォームと同じ立場で安保・防衛を考えるようになった。

村田 なるほどね。

大賀 それで、もういまは、当時我々が、佐久間さんが言った様なことをユニフォームが言ったら、すぐに問題にされ、新聞でも叩かれるような時代です。

村田 ですから、あれですね、佐久間先生が御退官の後に防衛庁顧問に制服として初めておなりになったということは、やっぱり画期的なことだったんですね。

大賀 そうですね。もう、それだけ時代が変わってきたということですね。それで、いまは、次官は警察よりも、大蔵の方が多いですよね。どちらかという。まあ、運輸省は、島田さんぐらいが、運輸省からの次官で、後はもう警察と大蔵省、丸山さんは……

村田 警察ですね。

大賀 生え抜き、まあ、夏目さんは生え抜きとは言えんかもしれませんが、まあまあ、生え抜きですよ。それと、亡くなった西広さん。しかし大蔵から来る人なんかも、皆非常に、良い…微妙だけど良いって言いますね。このところ秋山さんですけど、まあ、佐藤経理局長にしても、大蔵を敵にして、非常に堂々と戦ってくれていると、ユニフォームは評価しています。

村田 そういう意味では、内局の質も上がったと確実に言えましょうね。

大賀 それは言えますね。はい。まあ、宝珠山長官も、私が人事課長の時の、内局の人事一課の海の担当の部員だったんです。あの人なんかも非常にはきはきしています。大分…あのころまだ、課長前ですからねえ…だけどあの頃の人達はたいへん良くなりましたね。当初あちこちの省から来た人は、ちょっと、腰を掛けてまた元へ帰るとかいう風でしたからですね。

村田 なるほどね。…今日は本当に長時間、有難うございました。